

■巻頭言 幼稚園・小学校・中学校・高等学校の特別支援教育を語ろう！

筑波大学特別支援教育研究センター 柘植 雅義

日本の義務教育段階の子どもが100人とすると・・・

現在、日本では、義務教育段階にある者、つまり小中学生は1,010万人ほどいる（文部科学省による2015年5月1日付の調査で、2016年公表の最新データ）。

それを、分かりやすく、日本の小中学生を100人としてみると、特別支援教育が必要と思われる児童生徒は10人である。つまり、10人に一人。そして、その10人の内の9.3人が小中学校に通い、0.7人が特別支援学校に通っている。そして、その9.3人の内、6～7人が（知的障害のない）発達障害もしくはその可能性がある。さらに、小中学校で通級による指導を受けている者が0.9人、特別支援学級で学んでいる者が2人である。

つまり、現在、特別支援教育を必要としている児童生徒（10人）は、その大半（9人以上）が小中学校で学んでいるのである。20年前あるいはそれ以前とは全く異なった状況で、隔世の感がある。その背景には、近年の国連の提唱するインクルーシブな教育や社会、日本における共生社会の実現などがある。

したがって、小中学校における特別支援教育の推進、通級による指導や特別支援学級における指導・支援、通常学級における指導・支援の先導的研究や先導的実践が強く求められる。全国の実験校への期待は大きい。



障害のない子への特別支援教育と2E教育

2000年までの特殊教育と、2001年から助走が始まり途中制度改正などを経て誕生した特別支援教育の間の根本的な違いの一つは、特殊教育は、障害のある者だけのための教育だったが、特別支援教育は、障害のある者はもちろんのこと、障害のない者・共に学ぶ者へのなくてはならない教育でもある。あるいは、小中高等学校で、特に高い才能があり、併せて発達障害などがある者への特別支援教育（2E教育(twice exceptional education)）も本格的に始まる予感がする。

一つの箱に入るということ

人は、一つの箱に入ると、やがて、その箱のことしか分からなくなっていく、もしかしたら、他にも箱があることすら忘れてしまいそうになることがある。一つずつの箱の品揃えとか箱毎の役割とかニーズとか、・・・時代の変化や要請により刻一刻と変化する。自分の入った箱の中で精一杯頑張ってみるだけではなく、時に、ふと箱から顔を出して、他の箱のこと、そもそもどのような箱が全体的に散らばっているのか、昨日と比べて、昨年と比べて、10年前と比べて、どのように変わって来ているかを意識的に知ることを大切にしたい。

<参考> 時事通信：内外教育 巻頭言 『特別支援教育の“重心”』、『特別支援教育の“範囲”』、『特別支援教育の“免許”』、『特別支援教育の“終点”』、『特別支援教育と“根拠”』、『特別支援教育と“障壁”』
(いずれも柘植の執筆で2014～2016)

■ JICA 報告

今年度、当センターでは JICA(独立行政法人国際協力機構)筑波からの委託を受け、課題別研修「障がいのある子どものための授業づくり」を11月24日(木)～12月16日(金)にかけて行いました。

研修員はソロモン、ケニア、モロッコ、ニウエ、フィジー、パラオ、レソト、スワジランドのアフリカ、オセアニアの8カ国より計11名が来日し、附属特別支援学校5校の見学をはじめ、講義、ワークショップ、ディスカッションなど密度の濃い3週間あまりの日々を過ごしました。



附属特別支援学校の見学では授業参観を中心に、各学校の障害特性に合わせた特色ある学校教育についてたくさんのお話を聞かせていただきました。研修員からも積極的な質疑があり、どの学校においてもとても充実した内容で参観をすることができました。短い時間ではありましたが、児童生徒と研修員が交流する場面もありました。附属桐が丘特別支援学校では小学部5、6年生の児童8名が自分たちで調べた「日本の自慢」として、畳と和菓子について研修員に英語で発表しました。その後、実際に畳の上に座って、和菓子と緑茶を振舞い、研修員は大変おいしそうに味わっていました。その他の学校でも児童生徒からあいさつをして声をかけ、日頃から親しんでいる英語で実際にコミュニケーションを取って、お互いうれしそうに笑い合う姿もよく見られました。

研修では当センターの教材・指導法データベース(英語版)を使って、教材の検索や閲覧を体験し、教材に着目したワークショップも行いました。11名の研修員は2グループに分かれ、こちらから紹介した「すごろく」「短冊黒板」「新聞棒」の3つの教材の中から、1つまたは2つを選び、指導場面や指導方法、対象に合わせたアレンジなど、教材について様々な視点から意見交換をしました。データベースを使った感想や意見、教材についてまとめた成果品は12月3日(土)のセンター主催セミナーで発表・展示されました。



今回、インクルーシブ教育の現場見学として、茨城県守谷市立大井沢小学校へ行きました。大井沢小学校では5つの特別支援学級の授業を参観し、その中では先日ディスカッションの題材となった「すごろく」を使った授業を2つも見ることができ、教材を用いた授業実践に高い関心が示されました。



最終日の成果報告会では、各研修員より帰国後のアクションプランが発表されました。どの研修員からも個別の指導計画の有用性と、今後自国における活用の方策について述べられ、本研修の目標達成を伺うことができました。

最後に、研修員からのコメントを一部紹介します。

- * 学校視察や講義は本当に楽しく、多くを学んだ。
- * 学習指導案、個別の指導計画、教育支援計画について学んだことは特に有益であった。また、指導案に沿って授業が行われている様子を見学できてよかった。
- * 特別支援教育における校長や教員のコミットメントと知識が素晴らしい。
- * 使用済みのものを教材に再利用することが印象的だった。
- * 日本人は仕事好きで、すべての人が自分の仕事に感謝している。謙虚な態度なので、誰がどの地位にいるのかわからない。

■ 12月センター主催セミナー：12月3日（土）

教材・指導法データベースとそこに紹介された教材を題材に、国際貢献の観点からその活用と発展の可能性について、JICA研修員との意見交換を行いました。第1部では、研修員がデータベースへの評価コメントと自国での教材活用案の発表を、第2部では、2名のパネリストが自身の海外経験に基づいた途上国における教材の普及やデータベースの在り方についての発表を行いました。どちらも、活発な意見交換が行われました。研修員からは、身近な材料で教材を工夫する創造性の必要性、子どもの障害の実態に応じたきめ細やかな教材の有効性、特別支援教育に携わる

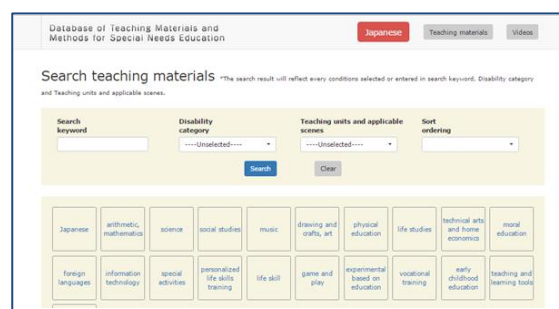


教員の情熱、などについて多くの発言がありました。私達にとっても、海外の教育事情について知り、データベースによる情報発信や支援を行う上での課題を知る機会となりました。今後、これらをふまえてデータベースの改善を行っていく予定です。

■ 教材・指導法データベース 英語版公開・動画追加

データベース構築に向けた本格的な取り組みが始まり4年目となりました。本データベースは、附属特別支援学校5校で開発された教材・指導法を集約し、障害種を超えた活用につなげることを目的に作成され、2016年4月に公開されました。本年度は、英語版作成と動画データ実装の2点を目標に、センタースタッフ会議と5附属連絡会議で検討を重ねて作業を進めてきました。

英語版作成にあたり、これまでJICA研修員を受け入れてきた経験を活かし、どこの国でも手に入る材料を使った教材という視点で英訳教材を選定し、その訳語の確認あるいは用語の整理、統一を図りました。また動画データの実装では、附属特別支援学校5校より数点ずつを集約しました。およそ1分程度にまとめた動画を撮影し、端的に教材の使用方法がわかるよう心がけました。ぜひ一度、ご覧ください。



■ 研修生日記

課題研究がまとめの時期に入りました。日々、文献とデータ、パソコンに向かっていきます。

これまでセンターや附属5校での講義や演習では、多くの先生方の御指導から、知見を広め指導実践力を高める機会をいただき研修を進めることができました。

また指導教員の柘植雅義先生には御多用にもかかわらず、研究の基礎から丁寧に御指導いただき、深く感謝申し上げます。

今後の研修期間も、「すべては子どもたちのために」をモットーにして、研修研鑽に励んでいきたいと思ひます。

*鈴木 紀子

(千葉県立八千代特別支援学校)



センターでの講義や附属校での演習、大学や大学院での聴講、課題研究と充実した毎日を過ごしています。米田宏樹先生をはじめ、大学やセンターの先生方に御指導いただきながら、自分が抱えていた疑問と向き合い、突き詰めて考える機会を得られたこの一年は、これからの自分にとって、とても貴重な経験になると思ひます。

残りわずかな研修生活ですが、大切に過ごしたいと思ひます。

*畠山 建

(北海道新篠津高等養護学校)



■附属ニュース（附属視覚特別支援学校）



12月16日（金）東京都特別支援学校総合文化祭オセロ大会が、東京都立北特別支援学校にて開催され、本校から中学部オセロ部の部員12名が参加しました。このオセロ大会には都内の特別支援学校から総勢66名が参加し、障害種を越え、それぞれに適した方法で熱い対戦を繰り広げました。普段は関わるのが少ない視覚障害以外の障害をもつ同年代の人と、オセロを通して時間を共有できる貴重な機会です。この大会で出会ったことをきっかけに、年1回附属桐が丘特別支

援学校の生徒とのオセロ交流会も恒例となりました。

今大会残念ながら入賞者はいませんでした。普段とは違う緊張の中、他校の高等部生にも果敢に挑み、予選の5試合の真剣勝負で全員が2勝以上の成績を収めました。今年優勝できなかつた悔しさを晴らせるよう、来年の大会に向けて練習を重ねていきます。



■附属ニュース（附属聴覚特別支援学校）

平成28年10月13日～14日、第50回全日本聾教育研究大会(附属大会)が、附属聴覚特別支援学校を主管校として開催されました。第50回の節目となった今大会では、「聴覚障害教育の専門性のさらなる追究と共有」を大会主題とし、齋藤佐和筑波大学名誉教授、四日市章筑波大学名誉教授による基調講演と、幼稚部、小学部、中学部、高等部普通科、高等部専攻科、寄宿舍での授業研究分科会、教育テーマ別に分かれた研究協議分科会が行われました。全国の聴覚障害教育に関わる約700名が参加し、研究発表も106件を数えました。



開会式には、秋篠宮妃殿下と眞子内親王のご臨席を賜り、秋篠宮妃殿下からは手話でお言葉を頂戴いたしました。

これまで聴覚障害教育が築き上げてきた「専門性」と、社会や時代の変化に伴って表れてきた新たな役割や課題を全国の特別支援学校(聴覚障害)で共有することができ、今後の各教育現場の実践に向けて大きな成果をあげることができました。(橋本 時浩)

■3月セミナーのご案内：センターHPでもご案内しています

今回は、附属特別支援学校で長く教鞭をとられてきた講師2名をお招きします。授業や教育について、ご自身の知見や想いをご講演いただきます。貴重な機会です。是非ご参加ください。

1. 日時 3月27日（月） 13:00～16:30
2. 場所 東京キャンパス文京校舎 134講義室
3. テーマ 特別支援教育の伸展（7）－指導法の豊かさを願って：先輩からのエール－
4. 申込み E-mail: snerc@human.tsukuba.ac.jp, Tel: 03(3942)6923

■附属行事予定（1月～3月）

- | | |
|-----------------|-------------------------|
| 2月 2日（木）～ 3日（金） | 桐が丘・研究協議会 |
| 2月10日（金） | 大塚・研究協議会 |
| 2月16日（木）～17日（金） | 視覚・公開講座 |
| 2月18日（土） | 視覚・研究協議会 |
| 3月 4日（土） | 障害科学学会 |
| 3月 9日（木） | センター現職教員研修生・研修成果報告会、修了式 |

